

教材研究と教材の扱い方 (15)

——「ガイアの知性」龍村仁——

—

教育出版「中学国語 伝え会う言葉②」所収の「ガイアの知性」(龍村仁)を取り上げる。

筆者の龍村仁は、『地球交響曲(ガイアシンフォニー)』シリーズなどの映画で有名な映画監督である。「ガイア(地球)」は、様々なものが支えあつて初めて生命体として存

5 命との対話

ガイアの知性

龍村仁

ガイア

(二)では地球のこと、地球上のすべてのものを一つの生命体として捉えている。

第一巻

ここ数年、わたしには鯨と象を撮影する機会がとても多かった。特に意識的に選んだつもりはないのに、結果としてそうなってきた理由を考えてみると、これは、鯨や象と深くつきあっている人たちが皆、人間としてとてもおもしろかったからだ。

人種も職業も皆それぞれ異なっているのに、彼らには独特の、共通した雰囲気がある。

彼らは、鯨や象を、自分の知的好奇心の対象とは考えなくなってきている。鯨や象から、なにかとつてもなく大切なものを学び取ろうとしている。そして、鯨や象に対して、畏敬の念さえ抱いているようにみえる。

人間が、どうして野生の動物に対して畏敬の念まで抱くようになってしまうのか。

対象

▼畏敬

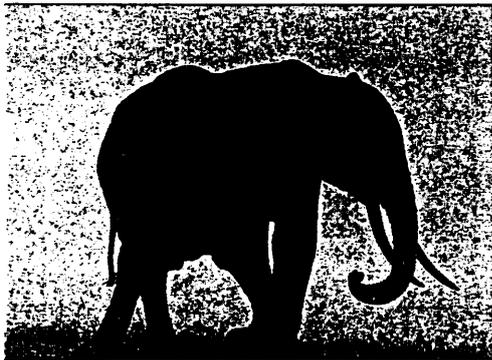
第一巻

158

在する、というメッセージがどのシリーズからも伝わってくる。

この「ガイアの知性」も、この考え方に基づいて書かれたものであるが、どのような点が教材としての価値であるのか、考えてみたい。

本文は、次の通りである。



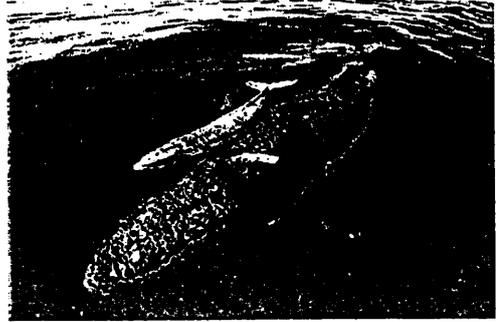
だろうか。この、人間に対する興味から、わたしも鯨や象に興味を抱くようになった。そして、自然の中の鯨や象との出会いを重ね、彼らのことを知れば知るほど、わたしもまた、鯨や象に畏敬の念を抱くようになった。

今では、鯨と象は、わたしたち人類にある重大な示唆を与えるために、あの大きな体で(現在の地球環境では、体が大きければ大きいほど生きるのが難しい。)数千万年もの同じ地球に生き続けてきてくれたのでは、とさえ思っている。

▼示唆

ガイアの知性

159



大脳新皮質の大きさとその複雑さからみて、鯨と象と人はほぼ対等の精神活動ができる、と考えられる。すなわち、この三種は、地球上で最も高度に進化した「知性」をもった存在だ、と、

大脳新皮質
部の部分の拡大
図

いうことができる。実際、この三種の誕生からの成長過程はほぼ同じで、あらゆる動物の中で最も遅い。一歳は一歳、二歳は二歳、十五、六歳でほぼ一人前になり、寿命も六、七十歳から長寿のものまで百歳まで生きる。本能だけで生きるのではなく、年長者から生きるためのさまざまな知恵を学ぶために、これだけゆっくりと成長するのだろうか。このような点からみると、鯨と象と

寿一寿命

愚一知恵

人は確かに似ている。しかし、だれの目にも明らかのように、人と他の二種とは何かが決定的に違っている。

現代人の中で、鯨や象が自分たちに匹敵する「知性」をもった存在である、と素直に信じられる人は、まずほとんどいないだろう。それは、我々が、言葉や文字を生み出し、道具や機械をつくり、交通や通信手段を進歩させ、今やこの地球の全生命の未来を左右できるほどに科学技術を進歩させた、この能力を「知性」だと思いつこんでいるからだ。

これらの点からみれば、自らは何も生産せず、自然が与えてくれるものだけを食べて生き、あとは何もしていないようにみえる(実はそうではないのだが)鯨や象が、自分たちと対等の「知性」をもった存在とはとても思えないのは、当然のことである。

しかし、一九六〇年代に入って、さまざまな動物から、鯨や象たちと深いつきあいをするようになった人たちの中から、この「常識」に対する疑問が生まれ始めた。

匹一▼匹敵

鯨や象は、人の「知性」とは全く別種の「知性」をもっているのではないか、あるいは、人の「知性」は、このガイアに存在する大きな「知性」の偏った一面の現れであり、もう一方の面に鯨や象の「知性」が存在するのではないか、という疑問である。

この疑問は、最初、水族館に捕らえられたオルカ(シャチ)やイルカに芸を教えようとする調教師や医者や心理学者、その手伝いをした音楽家、鯨の脳に興味をもつ大脳生理学者たちの実体験から生まれた。

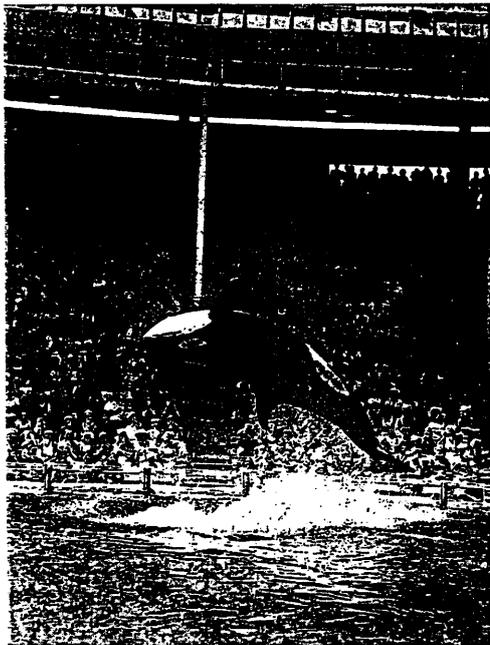
彼らが異口同音に言う言葉がある。それは、オルカやイルカは決して、ただえさを欲しががために本能的に芸をしているのではない、ということである。

彼らは捕らわれの身となった自分の状況を、はっきり認識している、という。そして、その状況を自ら受け入れると決意した時、初めて、自分とコミュニケ―ションしようとしている人間、さしあたっては調教師を喜ばせるために、そしてその状況の下で自分自身も、精いっぱい生きることを楽しむために、「芸」と呼ばれることを始めるのだ。水族館でオルカが見せてくれる「芸」のほとんどは、実は人間がオルカに強制的に教えこんだものではない。オルカのほうが、人間が

偏一偏る

オルカ(シャチ)やイルカは乳類哺乳目

に属する。



求めていることを正確に理解し、自分のもっている高度な能力を、か弱い人間（調教師）のレベルに合わせて制御し、調整をしながら使っているからこそ可能になる「芸」なのだ。

例えば、体長七メートルもある巨大なオルカが、狭いプールでちっぴけな人間を背ヒレにつかまらせたまま猛スピードで泳ぎ、プールの端にくると、合図もなしの自ら細心の注意をはらって人間が落ちないようにスピードを落とし、そのまま人間をプールサイドに立たせてやる。また、水中から、直立姿勢の人間を自分の鼻先に立たせたまま上昇し、その人間を空中に放り出す際には、その人間が決してプールサイドのコンクリートの上に投げ出されず、再び水中の安全な場所に落下するよう、スピード・高さ・方向などを三次元レベルで調整する。こんなことがはたして、ムチと始による人間の強制だけでできるだろうか。ましてオルカは水中で生活している七メートルの巨体の持ち主なのだ。

そこには、人間の強制ではなく、明らかに、オルカ自身の意志と選択がはたしている。狭いプールに閉じこめられ、本来もっている高度な能力の何万分の一も使えない過酷な状況におかれながらも、自分が「友」として受け入れることを

巨一巨大

▼細心

昇一上昇

▼三次元

択一選択

臨一▼過酷

決意した人間を喜ばせ、そして自分自身も生きることを楽しむオルカの「心」があるからこそできることなのだ。

また、こんな話もある。

人間が彼らに何かを教えようとする、彼らの理解能力はおどろくべき速さだ。そうだけれども、同時に、彼らもまた人間に何かを教えようとする、というのだ。フロリダの若い学者が、一頭の雌イルカに名前をつけ、それを発音させようと試みた。イルカと人間では声帯が大きく異なるので、なかなかうまくいかなかった。それでも、少しずつうまくいったときには、その学者は頭を上下にうんうんと振った。二人（一人と一頭か）の間ではそのしぐさが、互いに了解した、という合図だった。何度も繰り返しているうちに、学者は、そのイルカが自分の名前とは別の、イルカ語のある音節を同時に繰り返し発音するの気がついた。しかしそれが何を意味するのかはわからなかった。そしてある時、はたと気づいた。「彼女はわたしにイルカ語の名前をつけ、それをわたしに発音せよ」と言っているのではないか。そう思った彼は、必死でその発音を試みた。

自分でも少しうまくいったかな、と思った時、なんとその雌イルカは、うんうん

▼しぐさ
繰一繰り返す

フロリダ
アメリカの州の

んと頭を振り、とてもうれしそうにプールじゃうをはしゃぎまわったというのだ。象については、こんな話がある。

アフリカのケニアで、ある自然保護官が象の寿命を調べるため、自然死した象の歯を集めていた。草原で新しく見つけた歯を持ち帰り倉庫に納めておいたところ、その日から毎晩、巨大な象がやってきて、倉庫のかんぬきを明けようとする。不思議に思ったその保護官は、ある晩、かんぬきを開けたままにしておいた。すると、翌朝、数百個も集められていた歯の中から、その新しく収集した歯だけがなくなっていた。保護官がその歯を捜したところ、その歯はなんと、彼が発見したまきその場所にもどされていたのだ。毎晩倉庫にやってきた象は、たぶんなくなつた象の肉親だったのだろう。それにしてもその象は、どうやって歯が倉庫にあることを知ったのだろう。数百個もある歯の中から、どうやって肉親の歯を見分けたのだろう。そして最大のなぞは、その象が、なぜ歯を元の場所にわざわざもどしたのだろう、ということだ。

このように、象や象が高度な「知性」をもっていることは、たぶんまちがいない

捜一捜す

▼かんぬき



味から、わたしも鯨や象に興味を抱くようになった」がそれである。

では、筆者を引きつけた人たちが、どのように「人間としてとてもおもしろかった」のであろうか。形式段落の二段目に「人種も職業も皆それぞれ異なっているのに、彼らには独特の、共通した雰囲気がある」と説明される。「人種も職業も皆それぞれ異なっている」に注目すると、筆者は過去、地域の異なる所に住んでいる人々との、また様々な職業の人々との交流を持っていることが分かる。彼らが持つている「共通した雰囲気」とは、「鯨や象を、自分の知的好奇心の対象とは考えなくなってきた」。鯨や象から、なにかとてつもなく大切なものを学び取ろうとしている。そして、鯨や象に対して、畏敬の念さえ抱いているように見える」というものである。ある時間にある場所出会った人が「鯨や象」に対し共通して「畏敬の念」を持っていることを発見した。筆者にとつては驚きとも不思議な感覚とも言えるような体験であったのだろう。

筆者の出会った人たちが「人間としてとてもおもしろかった」という表現の裏には、場所や時間など多くの蓄積や通常とは異なる認識を持った人たちとの出会いがあったのである。

次いで書かれている「人間が、どうして野生の動物に対して畏敬の念まで抱くようになってしまふのだろうか」か

ら、筆者は事の初めに於いては我々と同じような感覚を持つていることが分かる。日常的に「鯨や象」との出会いを持つていない者が持つている、一般的な物事のとりえ方である。しかし、「この、人間に対する興味から、わたしも鯨や象に興味を抱くようになった。そして、自然の中の鯨や象との出会いを重ね、彼らのことを知れば知るほど、わたしもまた、鯨や象に畏敬の念を抱くようになった」とあり、「鯨や象」に「深くつきあうようにな」れば、人間は「鯨や象」に「畏敬の念」を持つようになるというのである。

そして、「鯨や象」に「畏敬の念」を持つてば、次のような認識を得るといふ。

「今では、鯨や象は、わたしたち人類にある重大な示唆を与えるために、あの大きな体で（現在の地球環境では、体が大きければ大きいほど生きるのが難しい。）数千万年もの間この地球に生き続けてきてくれたのは、ときえ思っている。」

「生き続けてきてくれた」、「さえ（思っている）」（傍点論者）と書いている所に、「鯨や象」に「畏敬の念」を持つている筆者の認識が伺える。

ここで、注意しておかなければならないのは、「人類は、

なぜ今までこのような見方をしてこなかったのか」という点である。我々の「ものの見方」が問われている。

一転して次に書かれるのは、人類と鯨と象三種に共通する特質の説明である。まず、前述の「鯨や象」に深く関わった人から受けた感想とは違って、科学的に人類と鯨と象三種に共通する性質を説明している。「大脳新皮質の大きさとその複雑さからみて、鯨や象と人はほぼ対等の精神活動ができる、すなわち、この三種は、地球上で最も高度に進化した『知性』を持った存在だ」という。現代に至るまで、「鯨と象と人間」とが対等の精神活動ができるという認識は人間には無かった。この教材は、そこにくさびを打ち込んでいいる。この認識を自分のものとすることができるかどうかは、各個人に課せられた大きな課題である。簡単にできることではない。「鯨と象」と「人間」とは、体の作り、生態や知性による生産性の有無などが異なる。これが二十世紀に至るまで人間が持ってきた常識であろう。しかし、「大脳新皮質の大きさとその複雑さからみて、鯨や象と人はほぼ対等の精神活動ができる」という。人間を上位に置き、鯨や象などの動物を下位に置いてきた人間の常識を変革するには、常識を崩す決定的な証拠が要る。人種が違って、人間には「知性」があることは誰でも知っている。その「知性」を「鯨と象」が持っているという。一概には信じられないことである。たとえ証拠が示されたとしても、

「そういうものは知性とは言わない」と簡単に言ってしまう常識を、一般人は持っている。筆者も、最初は我々と同じ認識に立っていたのである。しかし、鯨や象に関わった人間を「知れば知るほど」、また鯨や象との「出会いを重ね」ることによって、一般人として持っていた常識を覆すことになったという。

文章の展開は、当然我々を納得させるための説明に費やされることになる。そこで、述べられているのが三種の成長過程である。「実際、この三種の誕生からの成長過程はほぼ同じで、あらゆる動物の中で最も遅い」という。次いで、筆者の感想が述べられる。「(鯨や象は)本能だけで生きるのではなく、年長者から生きるためのさまざま知恵を学ぶために、これだけゆっくり成長するのだろう。このような点から見ると、鯨や象と人は確かに似ている」という。そして、第一段の最後に述べられる「しかし、だれの間にも明らかのように、人と他の二種とは何かが決定的に違っている」という表現は、第二段への橋渡しになっている。筆者の主張が素直に受け入れられない人々への筆者の配慮である。

*

第二段は、第一段の末尾を受けて「現代人の中で、鯨や象が自分たちに匹敵する『知性』を持った存在である、と素直に信じられる人は、まずほとんどいないだろう」と書

き出される。続いてその理由が述べられている。「それは、我々が、言葉や文字を生み出し、道具や機械をつくり、交通や通信手段を進歩させ、今やこの地球の全生命の未来を左右できるほどに科学技術を進歩させた、この能力を『知性』だと思いきこんでいるからだ」。確かに、自然や自然の中に生きている動物とかけ離れた生活をしている我々は、『知性』をそのようなものとして認識してきた。

「しかし、一九六〇年代に入つて、さまざまな動機から、鯨や象たちと深いつきあいをするようになった人たちの中から、この『常識』に対する疑問が生まれ始めた。」「鯨や象は、人の『知性』とは全く別種の『知性』をもっているのではないか、あるいは、人の『知性』は、このガイアに存在する大きな『知性』の偏った一面の現れであり、もう一方の面に鯨や象の『知性』が存在するのではないか、という疑問である。」

「この疑問は、最初、水族館に捕らえられたオルカ（シャチ）やイルカに芸を教えようとする調教師や医者や心理学者、その手伝いをした音楽家、鯨の脳に興味をもつ大脳生理学者たちの実体験から生まれた」と紹介する。

第二段は、我々の常識に揺さぶりをかける役割を持っている。我々は「知性」は万物の霊長である人間にだけ与えられていると思ひ込んでいたからである。「知性とは何か」を改めて尋ねられると、前述したような意味規定をするで

あろう。しかし逆に、「鯨や象やオルカにも『知性』がある。それは真実である」と言われると、ほとんどの人が「えっ」と驚くに違いない。「知性」は人間だけが持っているものであり、他の動物に「知性」があるとは思っていないからである。

このような教材に接する意味は、どのあたりにあるのか。筆者の述べていることに従つて、「鯨や象、オルカ、イルカ」に「知性」があることを理解しても、それが単に知識が増えたことにとどめていては何にもならない。このようなことを知ったことが、我々の認識や行動に決定的な働きをしてこそ、教材に接した意味がある。

「鯨や象」に人間とは異なる「知性」があるのではないかという疑問は、「最初、水族館に捕らえられたオルカ（シャチ）やイルカに芸を教えようとする調教師や医者や心理学者、その手伝いをした音楽家、鯨の脳に興味をもつ大脳生理学者たちの実体験から生まれた」という。「最初」とわざわざ注意書きしたことに注意したい。「鯨や象」に知性があることを述べるために、「オルカやイルカ」の例から書き始めている。ある種の動物に「知性」があることに気付いたのが、「オルカやイルカ」の調教師などの人々であった。それが「最初」であったのである。「鯨や象は、人の『知性』とは全く別種の『知性』をもっているのではないか」という結論に至るためには、「オルカやイルカ」などに対して

の観察が先に行われていたのである。「最初」という言葉と「鯨や象に知性がある」という結論との関係を押さえておきたい。

第二段の後半は、それらの動物に「知性」があることを、例を挙げて証明している。第一に「オルカ」であり、第二に「イルカ」であり、最後に「象」である。この三つの事例にかなりの量を割いて筆者は叙述している。ここで注意しておかなければならないのは、『オルカ』、『イルカ』、『象』に知性があることを証明するために、なぜそれぞれに同じ位の量を割いて説明しているのかということである。『オルカ』に『知性』があることが証明されたのなら、『イルカや象』の説明は省略してもいいではないか」と尋ねてみるのも面白い。我々読者は、「知性」という意味において「オルカ」と「イルカ」と「象」とが同列には結び付いていないのである。従って、読者に対してそれぞれに説明が必要になるという訳である。

では、「オルカやイルカ」の知性とはどのようなものか。調教師たちは次のようにとらえた。「オルカやイルカは決して、ただえさを欲しいがために本能的に芸をしているのではない」、「彼らは捕らわれの身となった自分の状況を、はつきり認識している」。そして、「人間が芸を教えている」と思い込んでいたことにも、異なつた認識を持つに至っている。ここは丁寧な叙述を押さえて置かなければならない

箇所である。「芸を教える」という行動を考えた場合、(調教師などの)人間は対象となる動物に対して能動的に関わる。それに対して対象となる動物は、人間の教えるまたは求める芸のレベルまで、練習を重ねて到達するというのが一般的である。猿や犬の例がそうであろう。しかし、「オルカやイルカ」の場合は異なっている。「オルカやイルカ」の方から能動的に人間に関わつていなければ理解出来ない行動があるというのである。そこに触れた箇所を抜き出してみよう。叙述は、結論から先に書いている。

・オルカやイルカは決して、ただえさを欲しいがために本能的に芸をしているのではない

・彼らは捕らわれの身となった自分の状況を、はつきり認識している。

・(捕らわれの)状況を自ら受け入れると決意したした時、初めて、自分とコミュニケーションしようとしている人間、さしあたっては調教師をよろこばせるために、「芸」と呼ばれることを始めるのだ。水族館でオルカが見せてくれる「芸」のほとんどは、実は人間がオルカに強制的に教え込んだものではない。オルカのほうが、人間が求めていることを正確に理解し、自分のもっている高度な能力を、か弱い人間(調教師)のレベルに合わせて制御し、調整をしながら使っているからこ

そ可能になる「芸」なのだ。

次いで、この結論に至った事例が報告される。

例えば、体長七メートルもある巨大なオルカが、狭いプールでちっぽけな人間を背ビレにつかまらせたまま猛スピードで泳ぎ、プールの端にいくると、合図もないのに自ら最新の注意をはらって人間が落ちないようにスピードを落とし、そのまま人間をプールサイドに立たせてやる。また、水中から、直立姿勢の人間を自分の鼻先に立たせたまま上昇し、その人間を空中に放り出す際には、その人間が決してプールサイドのコンクリートの上に投げ出されず、再び水中の安全な場所に落下するように、スピード・高さ・方向などを三次元レベルで調整する。こんなことがはたして、ムチと飴による人間の強制だけでできるだろうか。ましてオルカは水中で生活している七メートルの巨体の持ち主なのだ。

次の叙述は、すぐ前の事例に対する結論である。

そこには、人間の強制ではなく、明らかに、オルカ自身の意志と選択がはたらいっている。狭いプールに閉

じこめられ、本来持っている高度な能力の何万分の一も使えない過酷な状況におかれながらも、自分が「友」として受け入れることを決意した人間を喜ばせ、そして自分自身も生きることを楽しむオルカの「心」があるからこぞできることなのだ。

二箇所に述べられている結論の関係を、押さえておきたい。先に全体の結論が書かれ、次の結論は、事例に対する直接的な結論である。結論がどうして二箇所に書かれているか、考えてみると次のようなことが言えよう。

沢山の事例を踏まえて、全体の結論を述べる。そして、その結論を導き出した事例を紹介する。その際、最初の事例に対しての結論を付け加える。それは、オルカの実例が我々一般人の常識をはるかに越えた内容であるからである。このように読者の心にインパクトの強い内容の場合、結論が重ねて述べられても違和感を覚えないのである。

次は、二つ目の事例である。叙述は、オルカの例とは逆に結論を先に書き、事例をすぐ後に述べる。結論として、次のように述べる。

人間が彼らに何かを教えようとする、彼らの理解能力はおどろくべき速さだそうだけれども、同時に、彼らもまた人間に何かを教えようとする、というのだ。

次いで、この結論に至った事例の報告である。概略を説明すると、

フロリダの若い学者が一頭の雌イルカに名前をつけ、それを発音させようと試みた。うまくいった場合、頭を上下してうなづいた。二人（一人と一頭）でうなづきあうようになったのは互いに了解したという合図になったというのである。その後のことは本文を引用する。

学者は、そのイルカが自分の名前とは別の、イルカ語のある音節を同時に発音するのに気がついた。しかし、それが何を意味するかはわからなかった。そしてある時、はたと気づいた。「彼女はわたしにイルカ語の名前をつけ、それを私に発音せよ、と言っているのではないか。」そう思った彼は、必死でその発音を試みた。

自分でも少しうまくいったかな、と思った時、なんとその雌イルカは、うんうんと頭を振り、とてもうれしそうにプールじゅうをはしゃぎまわったというのだ。

この事例も、我々一般人を驚かせる。調教師や学者が出した結論を、納得して受け入れるに十分な内容である。

次に、最後の事例として象の話がある。概略を説明する

と、ある自然保護官が象の寿命を調べるために、自然死した象の歯を集めていた。すると、毎晩巨大な象が倉庫にやってきて倉庫のかんぬきを開けようとする。かんぬきを開けておくと、沢山の中から新しく収集した歯だけがなくなっていたという。後は本文を引用する。

保護官がその歯を捜したところ、その歯はなんと、彼が発見したまさにその場所にもどされていたのだ。毎晩倉庫にやってきた象は、たぶんなくなった象の肉親だったのだろう。それにしてもその象は、どうやって歯が倉庫にあることを知ったのだろう。数百個もある歯の中から、どうやって肉親の歯を見分けたのだろう。そして最大のなぞは、その象が、なぜ歯を元の場所にわざわざもどしたのだろう、ということだ。

第三段の書き出しは、次のようになっている。

このように、鯨や象が高度な「知性」をもっていることは、たぶんまちがいない事実だ。

ここで注意したいことは、筆者がわざわざ「高度な（知性）」と断ったことである。この箇所において初めて筆者は「高度な（知性）」という言葉を用いている。この言葉

は、万物の霊長としての人間に対して疑問を提示する働きを持つている。イルカなどの他にオランウータンなどの動物にも、知性があることは多くの人間は知っている。しかも、「オランウータンの知性は、人間でいえば、一、三歳児の知性にあてはまる」などという知識も得ているであろう。しかし、「象やオルカ」などの動物には人間を驚かすほどの「高度な知性」がある。人間の「知性」と鯨や象の「知性」を比較すると、「攻撃的な知性」と「受容的な知性」との違いという。「攻撃的な知性」と「受容的な知性」とはどのようなものか、次のような筆者の説明がある。

人間の「知性」は自分たちだけの安全と便利さのために自然をコントロールし、意のままに支配しようとする。いわば「攻撃的な知性」だ。この「攻撃的な知性」をあまりにも進化させてきた結果として、人間は環境破壊を起こし、地球全体の生命を危機に陥れている。これに対して、鯨や象のもつ「知性」は、いわば「受容的な知性」とでも呼べるものだ。彼らは、自然をコントロールしようとはいつさい思わず、そのかわり、この自然のもつ無限に多様で複雑な営みを、できるだけ繊細に理解し、それに適応して生きるために、その高度な「知性」を使っている。だからこそ、彼らは、我々人類よりはるか以前から、あの大きな体でこの地球に

生きながらえてきたのだ。

次いで、筆者の提言が述べられる。

同じ地球に生まれながら、片面だけの「知性」を異常に進歩させた我々人類は、今、もう一方の「知性」の持ち主である鯨や象たちからさまざまなことを学ぶことによって、真の意味の「ガイアの知性」に進化する必要がある、とわたしは思っている。

ここまで読んでくると、筆者の言っている「ガイアの知性」とは、「ガイアに住む者の知性」というものが含まれていることが分かってくる。

三三

この「ガイアの知性」の教材としての価値は、筆者の主張にあると私は思っている。こういう視点が今までに無かった、または尊重されてこなかったという背景があるように思う。その理由として時代的な価値観が大きく作用している。

二十世紀の特徴として、科学万能の時代、科学に対する信奉を培ってきた時代ということが出来る。科学に対す

る信奉が科学技術を開発し、人間にとって快適な、また豊かな生活を我々は追求してきた。自然開発に努力しエネルギー開発に情熱を傾けてきた。そこには、地球はどこまでも開発に耐えられるものだという誤った認識があったのであろう。

開発は、人間と自然との関係において、自然の方がはるかに大きいというものでなければ成り立たない。昔と違って二十世紀後半に開発した技術は、思った以上の破壊力を持つていた。これに対する認識が甘かったと言うべきである。効果を考えるが故に、機械化を進めてきたが、自然は人間が思っていた以上にデリケートにできていたのである。自然を開発した結果、自然破壊や地球温暖化の問題が我々に突きつけられてきた。しかも、地球が危機に瀕している、開発をとどめるだけの勇気を人類は持ち合わせていない。このままではいけないと思いつつも、科学技術に対する信奉を捨てきれないでいる。

この点を考えると、筆者の提言は非常に深い意味がある。全てにおいて人間を優位に置くことに対しての強い警鐘が鳴らされている。新たな視点、つまりガイア（地球）に住む者として、調和をもたらす「知性」を体得することがいかに重要か、その重要性が説かれている。

我々の課題として、「日常生活の便利さとガイアの関係性を、どれだけ自分のものとして受け取ることができるか」

が問われているのである。

*

ここで、映画「地球交響曲（ガイアシンフォニー）」を制作した龍村仁の言葉を引用したい。地球交響曲（ガイアシンフォニー）第二番、第三番のチラシ（残念だが、第一番のチラシが手許にない）に寄せた彼の言葉である。

第二番

もし、母なる星地球が本当に生きている一つの生命体である、とするなら、

我々人類は、その「心」すなわち「想像力」を担っている存在なのかも知れません。現代の地球の環境問題は、良い意味でも、悪い意味でも、人類の「想像力」の産物だと言えるのです。

だとすれば、危機が叫ばれるこの地球の未来も又、人類の「想像力」すなわち「心」の在り方によって決まってくるのです。

この映画は、21世紀の到来を前に、地球の未来にとって、示唆にあふれたメッセージをもつ人々のオムニバス映画です。

登場人物はいずれも、現代の常識にとらわれず、素晴らしい未来を築きつつある人達です。

今生きている我々ひとりひとりが「心」にどんな未来を

描くかによつて、現実の地球の未来が決まってくる…。
1992年に公開された「第一番」は、全国各地の観客自身による活発な自主上映活動に支えられ、94年末には、

全国400ヶ所25万人動員をはたしました。ひとりひとりの心のネットワークによつて自然発生的に拡がっていったこの上映活動は、

この映画のテーマ「人の心は無限の可能性を秘めている」を現実の実証している姿だと思えます。

このガイアネットワークの力によつて「第二番」が完成しました。

映画「地球交響曲」が、全ての人々の「心」のための元氣薬になれば、と願っています。 龍村仁

(本文は、横書き、中央揃え)

第三番のチラシには龍村仁の言葉はないが、彼の意を汲んだものとして引用したい。

第三番

「地球の声が聞こえますか。」という呼びかけで始まる

映画「地球交響曲」は、地球環境の美しさ大切さを訴えかけるだけではなく、

一人一人の心の無限の可能性に言及する「こころの映画」

として、大きな反響を呼んできました。

1992年11月「第一番」を初公開して以来、2年半後の1995年4月に「第二番」を公開、現在でも各地で毎日のように上映が続いて、

1997年夏までに全国2千ヶ所近く百万人の方々にご覧いただいております。

「地球交響曲 第三番」は、1996年8月カムチャツカで熊に襲われ亡くなった写真家星野道夫と行くはずだった、

南東アラスカから北極圏への壮大な自然の中での旅を縦糸にして、彼が魂を分かち合った人々に出会って行きます。

その旅と出会いの中で、人間にとっての生と死の意味、文化・文明の意味を問い続けます。

宇宙物理学者フリーマン・ダイソンは、宇宙的スケールで循環する生命の意味を、豊かな科学的視野と人間への深い洞察力から話してくれます。

撮影は野性のオルカ達が集まってくるカナダ・ブリティッシュコロンビア州のハンソン島。

タヒチからハワイまでかつて先祖達が渡ってきた外洋カヌーの航海を今に甦らせた、ハワイ先住民民族ナノイア・トンプソンは、

我々の先祖がいかに高度な能力と文化を持っていたかを

想い起こさせてくれるとともに、その記憶の甦りがいかに大切かを示してくれます。

「地球交響曲 第三番」は、私達のこころの奥に眠っている五千年以上の記憶を呼び覚まし、

「地球の心」の「いのちの不思議」に遠く思いを馳せる「魂のロードムービー」です。

(本文は、横書き、中央揃え)

*

「象や鯨」に関して、龍村仁の体験を記した文章がある。教材に関係するので該当部分を引用しておきたい。

心で「想う」ことが、「現実」になる、ということ
を最初に教えてくださったのは宇野(千代)先生だっ
た。先生はそのことを、言葉の意味としてではなく、
心の波動として伝えてくださった。最初に掲げたあの
言葉を語る時の、先生の全存在からあふれ出てくるあ
の雰囲気、そのことについての微塵の疑念も抱かず、
しかもそのことを全身全霊で、分かち合おうとする先
生の心の波動に私は圧倒されてしまったのだ。

言葉の持つ「意味」は、その大きな波動に乗って漂っ
てくる小さな帆船にすぎなかった。その時から私は、
心で「想う」ことが「現実」になる、ということにつ

いて、つまらぬインテリの懐疑心を捨てることにした。
そう言えば私は、撮影の現場で、心で「想う」こと
によって、起こりえないような「偶然」が現実になり、
撮影が成功した、という体験を数え切れないほど
持っている。特に、象や鯨など、言葉が通じない相手
との間にそのことがよく起こる。

エレナの場合もそうだった。エレナはアフリカ・ケ
ニヤの野性に住む三十六歳のメスの象、動物保護活動
家のダフニー・シエルドリックさんが最初に育てるの
に成功し、野性に還っていった孤児だった。エレナは
野性に還った後も、ダフニーさんとの関係を断ち切ら
ず、今も時々ダフニーさんと会っている。ダフニーさ
んが三歳ぐらいまで育てた象の孤児たちをダフニーさ
んから預かり、養母となって野性で生きるさまざま
な知恵を教えているのだ。ダフニーさんとエレナが協力
して育て野性に還っていった象の孤児たちはすでに十
数頭になると言う。

決して人間に慣れることのない、といわれるアフリ
カ象と人間の女性との間に、このような、実の母娘に
も似た親密な関係が続いていること自体、奇跡のよう
にも思える。しかも、エレナは自分の生んだ子ではな
い孤児たちを預かり、密猟者や外敵から守りながら育
てているのだ。さらにエレナは、二歳以下の、まだミ

ルクが必要な年齢の孤児を森の中で発見すると、わざわざダフニーさんのもとに連れて来るといふ。まだ自分の子を生んだことのないエレナにとつては、母乳を与えることだけはどうしてもできないからだ。

これはもはや、動物の無意識の「本能」ではない。自分を育ててくれた「母」の愛と叡知をエレナ自身が受け継いでいる、ということなのだろう。

さて、半年ぶりでエレナに会いにゆくダフニーさんを追つて広大な草原にわけ入った時のことだった。今、ダフニーさんの動物孤児院があるナイロビと、エレナが住むツアボ自然公園とは四百キロも離れている。もちろん通信手段などない。あつたとしても、人間の言葉をしやべらないエレナに、ダフニーさんが来ることは伝わるはずもない。しかし、エレナは、彼女が来ることを、なぜか必ず前もつて知っている、という。面会場所は、近くに小さな川の流れる草原のまつただ中だった。

「エレナ！ エレナ！」とダフニーさんが数回叫んだ。私たちにはまったく何も見えなかつた。草原を渡る風の音以外、一切物音のしない静寂が、長い間続いた。

突然はるか彼方の森の陰に動くものが見えた。エレナだった。

エレナは私が想像していたよりずっと巨大だった。

森のはずれの樹のてっぺんあたりからエレナの大きな顔が現れ、ゆつくりとこちらに向かって進んでくる。「エレナ！」と小さく叫んで、ダフニーさんもまっすぐにエレナに向かって歩き始めた。この再会シーンは、撮影しながら涙が出るほど感動的だった。エレナは、その大きく長い鼻で、ダフニーさんの背中をゆつくりとなでる。ダフニーさんは、ほとんど空を見上げるばかりにそり返りながら、エレナの眼の下のあたりをやさしく叩く。

そこには、象と人間、という種の違いなどまったく感じさせない「愛」の分かち合いがあつた。

私は、カメラマンに撮影の指示を与えながら、「エレナ、出て来てくれて本当にありがとう。あなたの存在を知ってから私は二年間ずっとあなたに会いたい、と想い続けてきたんだ。今、会うことができると本当に嬉しい。ありがとう」と心で思った。

不思議なことが起こつたのは、その時だった。

エレナがゆつくりとこつちを振り返り、ダフニーさんを抱いていた鼻をほどくと、私たち撮影隊のほうに向かつて歩き始めたのだ。一瞬、ひるんで後ずさりしそうになるスタッフを押しとどめながら私はエレナを待った。恐怖心などまったく感じなかつた。エレナはまっすぐにやって来て私を抱いてくれた。エレナの鼻

は固く、ゴワゴワした毛が生えていて少し痛かった。しかし私は、言いようにないほど「幸せ」な気分だった。

心で「想う」ことが伝わる仕組みは、まだ「科学的」には解明できていない。ひよつとすると「科学的」手
段では解明できないものなのかもしれない。

しかし、それは確かに伝わる。

しかもそれは、種の違いを越え、言葉を越え、空間を越えて確かに伝わる。今私たちは、この心で「想う」ということが、現実をつくってゆく上でどれほど大切なことか、ということを真剣に考え直す時代にきている。自分自身の未来も、それで決まってくるのかもしれない。宇野先生もエレナも、そのことをやさしく教えてくれているのだろう。

『地球（ガイア）のささやき』「心で「想う」」

（創元社、一九九五年三月）

四

以上の点を踏まえて、どのような授業が展開できるのか、発問と板書を中心に考えてみたい。

*

第一段

〔発問〕

- 1 冒頭の一文に注目してみよう。「ここ数年、わたしには鯨と象を撮影する機会がとても多かった」とあります。偶然撮影を重ねるということはありません。筆者が鯨と象を撮影しようと思うようになった事情とは、どういうものか考えてみましょう。
- 2 「鯨と象と深くつき合っている人たちが皆、人間として面白かったから」というのが、鯨と象を撮影するようになった理由やきっかけですが、「人間として面白かったから」というのは、どういう点で「面白かった」のですか。
- 3 そうですね。「人種も職業も異なっているのに、独特の共通した雰囲気」があつたのですね。その共通した雰囲気とは何ですか。
- 4 ここまで読んできて、確認したいことがあります。「鯨と象と深くつき合っている人」は、本当に筆者を引きつける条件や要件を備えていると言えるのでしょうか。
- (1) 「人種も職業も異なっているのに、独特の共通した雰囲気」とありますが、これをもう少し具体的に説明してみてください。
- (2) そういう人が「鯨と象」に関わると、どのよう

に変化するのですか。

- (3) 「鯨と象」に関わった調教師、医師、心理学者、音楽家、脳生理学者などが、「鯨と象」に対して、畏敬の念などを持つのですね。不思議ですね。そこで、考えて欲しいのですが、調教師、医師、心理学者、音楽家、脳生理学者と我々は異なると言えるのでしょうか。専門家だから、鯨と象に対する認識を得られたと言えるのでしょうか。
- (4) (3)が大切なのですね。それを確認しておきましよう。

5 では次に、「ここ数年、わたしには鯨と象を撮影する機会がとて多かったです」とありますが、それが筆者に与えた影響について考えてみましょう。結論的に述べられているのは、どの表現ですか。

↓「今では、鯨と象は人類にくとさえ思っている」

- (1) そうですね、ここには、調教師などの人々とは異なる筆者独自のとらえ方が表れています。中でも筆者の独自性が強く表現されているのは、どの表現によって分かりますか。

↓「生き続けてくれたのでは(ないか)」の「くれた」と「とさえ思っている」の「さえ」ですね。

6 5の結論を筆者は出していますが、「人」と「鯨

と象」とを比較して、三者の特徴をまとめています。それはどのようなものですか。

↓板書参照

〔板書〕

ガイアの知性

龍村 仁

第一段

- ・ 畏敬の念さえ抱いているように見える。
- ・ なにかとてつもなく大切なものを学び取るうとしている。
- ・ 知的好奇心の対象とは見ていない。

＝
人種も職業も皆それぞれ異なっているのに、彼らには独特の共通した雰囲気があった。

＝
鯨や象と深くつき合っている人たちが皆、人間として面白かったから。

(理由)

ここ数年、わたしには鯨と象を撮影する機会がとて多かったです。

・自然の中での鯨と象との出会いを重ね、彼らのことを知れば知るほどわたしもまた、鯨と象に畏敬の念を抱くようになった。

今では鯨と象は、人類にある重大な示唆を与えるために、あの大きな体で数千万年もの間、この地球に生き続けてきてくれたのでは、とさえ思っている。

三種（人間、鯨、象）の特徴

1 大脳皮質の大きさ・複雑さ↓ほど対等の精神活動ができる。

=

地球上で最も高度に進化した「知性」をもった存在だ。

2 誕生からの成長過程はほぼ同じで、あらゆる動物の中で最も遅い。

3 本能だけでなく、年長者から生きるためのさまざまな知恵を学ぶためにゆっくり成長するのだろう。

*

第二段

〔発問〕

1 「鯨と象が自分たちに匹敵する『知性』を持った存在である」という表現に注目してみましょう。

(1) この表現に対して反応が二つに別れますが、それぞれどういう人ですか。

↓「ほとんどの人」と「鯨と象たちと深いつきあいをするようになった人たち」

(2) この二者は、「鯨と象が自分たちに匹敵する『知性』を持った存在である」という言葉に対して、どのように反応するのでしょうか。

2 では、反応の異なるそれぞれの人たちの「理由」や「疑問の内容」はどのようなものか、考えてみましょう。

(1) 「ほとんどの人」の場合の「信じられない」理由は何ですか。また、「鯨と象と深く関わった人たち」が、「我々の常識」に疑問を持った中味は何ですか。

(2) 「鯨と象」が人間とは異なる「もう一つの『知性』を持っている」という発見をした経緯はどのようなものですか。

(3) この経緯を説明している文章の構成は、どのようなになっていますか。

第二段読解の段階で、『地球（ガイア）の知性のささやき』をプリントとして配付する。

〔板書〕

ガイアの知性

龍村 仁

第二段

- ・ 交通や通信手段を進歩させ
- ・ 道具や機械を作り

「知性」・この地球の全生命の未来を左右できるほどに科学技術を進歩させた

(理由) ・言葉や文学を生み出し

ほとんどの人

信じられない (知性に対する思い込みがある)。

鯨と象が自分(人間)たちに匹敵する「知性」をもった存在である

I

我々の「常識」に対する疑問が生まれ始めた。

鯨と象たちと深いつきあいをするようになった人たち

(疑問の中味)

- ・ 鯨と象は、人の「知性」とは全く別種の「知性」を持っているのではないか。
- ・ 人の「知性」——ガイアに存在する偏った一面

鯨と象の「知性」——(人間の「知性」とは異なる)もう一方の「知性」

この発見の経緯

- (1) 最初——調教師、医者、心理学者、音楽家、大脳生理学者の実体験から生まれた。

(2) 結論——ただ餌が欲しいために本能的に芸をしている訳ではない。

- ・ コミュニケーションをしようとする人間を喜ばせようとして
- ・ 自ら楽しむために

- A 七メートルもあるオルカの芸
- B 雄イルカの例(名前をつける)
- C アフリカ象(仲間の歯)

*

第三段

〔発問〕

1 第三段では、「人間」と「鯨と象」の「知性」が対比的にのべられています。その特徴の違いと価値を考えてみましょう。

(1) 人間の「知性」と鯨と象の「知性」は、それぞれどういう特徴があるか、要約した形で筆者が述べていますが、それはどの表現ですか。

(2) 人間の「知性」と鯨と象の「知性」に優劣が付けられますか。

(3) 人間の「知性」にプラス面(+)とマイナス面(-)がありますか、それは何でしょうか。

(4) 人間の「知性」に比べ、鯨と象の「知性」にマインスマイナス面(-)が無いのは、どうしてでしょうか。
2 結論的に述べられている、筆者のメッセージはどのようなものですか。

3 我々人間は、鯨と象の「知性」をどのように見れば良いのでしょうか。

4 「真の意味」とは、どのような意味ですか。
5 我々は、筆者のメッセージをどのように受け取れば良いのでしょうか。

(1) 筆者のメッセージを「受納する」立場と「信じられないものとして受納できない」立場が考えられますが、君(生徒)はどちらの立場を取りますか。

(2) (1)の立場を取る理由は、何だろう。
(3) (1)以外に、「今の段階で結論が出せない。しばらく考えたい」という立場もありますね。この立場も尊重されなければなりません。
6 筆者のメッセージが、我々に与えた影響について考えてみましょう。

〔板書〕

ガイアの知性

龍村 仁

第三段

このように、鯨と象が高度な「知性」を持っていることは、たぶんまちがいない事実だ。

(優) 自分たちだけの安全と便利さのために自然をコントロールし、意のままに支配する。

(劣) 環境破壊を起こし、地球全体の生命を危機に陥れている。

人間の「知性」 || 「攻撃的な知性」

鯨と象の「知性」 || 「受容的な知性」

(優) 自然のもつ多様で複雑な営みを、できる

だけ繊細に理解し、それに適応して生きるために、その高度な「知性」を使っている。

筆者のメッセージ

今こそ、人間以外の「知性」の持ち主である鯨と象からさまざまなことを学ぶことによって、真の意味の「ガイアの知性」に進歩する必要がある。

真の意味の「ガイアの知性」とは？

筆者のメッセージに対して

- 1 受納できる。
- 2 受納できない。
- 3 今の段階では結論が出せない。

1と3を選んだ理由

筆者のメッセージが、自分に与えた影響について

(すがわら けいぞう 本学教授)